

アンソロジー  
*anthology*

ね む  
合 歡

*Vol. 10*



# 2013 春

## 目次

俳句に助けられ	浅野純子	2
茂	石井宏幸	4
掌ほどの幸せ	井上悦男	6
夏から冬にかけて	植田桂之	8
旅に拾ふ	夏(一)	
四季とともに	梅田光憲	10
大戸 稔		12
木堂忌	桜本滋子	14
夏帽子	角南房子	16
尾道は花盛り	高城登代	18
さりげなく	谷口利子	20
秋から冬へ	富阪宏己	22
楽	長尾京子	24
朱夏	名木田純子	26
月の刻	信里由美子	28
稜線	蓮岡健美	30
夏から秋へ	三宅 進	32
丸亀城	山下祐子	34
海と道	與田武彦	36
潮風の色	米元ひとみ	38
爽やかや	渡辺牛二	40
悼みて	富阪宏己	43
俳句をちよつとかじつてみて		
嵯峨野	山下祐子	45
編集後記	石井宏幸	49
	渡辺牛二	50

# 俳句に助けられ

浅野純子

母の日に逝く母ありや暮れ泥む

アマリリス土を蹴りあげつんと咲き

田植あと少しデコボコ楽しかり

暑さ負け俳句も無礼し給ひて

朝顔がやつとカーテンらしくなる

無花果だ値段も見ずにカゴに入れ

彼岸花彼岸をすぎて咲き始め

秋の空視界がやけに広くなり

ねこじやらし風につつかれ踊り出す

枯れ松をきこりきこりと秋の風

# 茂

石井宏幸

石二つ重ねし神にしぐれけり

あをあをと空の暮れゆく落椿

帰りきてまた恋猫となりにゆく

薄氷の空と逢ふ時水になる

野の沖の未来のごとく初蝶来

揚雲雀雲かがよへば雲に消ゆ

桜葉降るや昨日を追ふやうに

蝶纏れ上がるはおのが影と逢ひ

振花に見えて芝には見えぬ風

奈落へと黙のなだれてゐる茂

# 掌ほどの幸せ

井上悦男

雲ひとつつ風も旅する瀬戸の秋

秋麗ちひさく欠伸かみころし

里の味菜虫と共にとどきけり

両の手に秋の香をつつみこみ

葉に包む無花果のせて回覧板

香より色のすつぱき檸檬かな

青空というろ住み分けて残る柿

格子窓まだ日の浅き柿すだれ

大根を貰ひ散歩を切り上ぐる

声で指しゆびで教へる返り花

夏から冬にかけて 植田桂之

窓枠は空の大きき雲の峰

次々と開く雨傘梅雨の駅

流灯の闇を灯して闇に消ゆ

魚の鱗あざやかに水澄みにけり

椋鳥の群を抱き込む大樹かな

鯰跳ねて湾は静かに暮れにけり

携帯の仄かな明かり秋の暮

秋の夜の昔を灯すランプかな

夕時雨鷺羽山から大橋へ

物の影しだいに長く冬に入る

旅に拾ふ…夏（一）

梅田光憲

麦秋や旅に聞き役しやべり役

箸置も切り子なりけり夏料理

さいころに切りし西瓜にもの足らず

見るからに近寄りがたきサングラス

潮焼か日焼か土佐の龍馬像

滝落ちる音に迷ひのなかりけり

瑠璃蜥蜴飛鳥恋ふやに石舞台

羅の光琳水とすれ違ふ

落城の仔細は知らず蟬しぐれ

露天湯へ飛び石伝ひ夕河鹿

## 四季とともに

大戸 稔

隠岐の島遙かに望む花の旅

納経帳捲れば滲む花の冷

母の日や名知らぬ花を届けし子

畔に立つ鷺に植田の整ひて

河鹿笛閉ざす湯宿のせせらぎに

嘶きの一声高き牧涼し

モナリザの絵に立止まる夏帽子

朝市に威厳放ちぬ茄子の艶

丹頂鶴故郷の川に根付きたる

鴨引きし池に横溝正史像



# 木堂忌

桜本滋子

木堂忌近づく庭の若葉風

木堂忌五月の空に思ふこと

木堂の手植の樟の若葉して

毅忌の薫風匂ふ野点傘

薫風や木堂の遺志子等の書に

木堂の遺墨鮮やか鉄線花

記念樹の忌日見守る樟若葉

薫風の書軸茶室に木堂忌

雨洗ふ新樹の庭や木堂忌

木堂の肉声若し風薫る

# 夏帽子

角南房子

夏帽子デツキの風と旅立てり

夕蟬の鳴きやまぬまま暮れにけり

和太鼓の遠くかすかに夜の秋

波音を貝に残して夕凧げり

秒針の律義に刻む熱帯夜

物影のどこか疲れし葉月かな

一匹のちちろに眠り目覚めけり

台風の瀬戸の小島を吹き寄する

何処へと消えてゆきたる夕蜻蛉

秋声を雑踏の端に聞くことも

# 尾道は花盛り

高城登代

春雨のほどよく色香連れて来し

一瞬の落花止まりて花の中

花筏満ち潮に乗り戻りけり

惜しみなく春爛漫となりし郷

今昔の備後尾道花盛り

雨煙り魚網濡れゆく寒の明け

やはらぐ日飛び立つ蝶の小さき事

曾祖母に童女の笑みや里桜

長閑しや一閃の文字右下がり

雨蛙雨小休止静かとす

さりげなく

谷口利子

騎馬戦にをなご大将若葉風

万緑や深海魚めく乙女像

桃洗ふいとほしきもの洗ふごと

老鶯や峡の温泉の溢れゐて

純白の和紙に包まれ箱の枇杷

濃紫陽花みるみる山雨迫りくる

汗止めの鉢巻派手に大工来る

いそいそとシャガール展へ白日傘

胸中は風のしめりや落し文

新蕎麦の香の青々と出されけり

## 秋から冬へ

富阪宏己

小鳥来る巣箱あつてもなかつても

草の花吹かれて風の花となる

虫の音の澄む夜は星の美しく

夜風とも駅筋の秋深むとも

試歩 一步一步に絡みつく落葉

冬ざるる瓦礫捨てられたる如く

北風強し真白き雲の輝きて

寒風の傍若無人なる日向

街の灯の研ぎ澄まされてゆく寒夜

街路樹のつながつてゆく芽立かな

# 楽

長尾京子

白子干器に盛られこぼれけり

風の道士筆三本持ち帰り

アナウンサー新茶の便り届けをり

鬘高く装ふ乙女の花浴衣

学園の吹奏楽や鯨の飛ぶ

樹々黒く月天心の里となり

猿蓑を借りて眺むる去来の忌

掌に匂ひころげし銀杏の実

鬼瓦庭にすゑられ石露の花

春著の子うさぎの如くはねてをり

# 朱夏

名木田純子

緑陰へ一步を下ろす舟着場

小窓てふ余白を残し蔦茂る

闇に焚く火色涼しき登り窯

夏暖簾地酒のかをりくぐりける

一掬の湧き水美し雲の峰

炎天を押し上げてゐる杉木立

白壁に風の影置く夏柳

七色の光しつぽに引く蜥蜴

ちりちりと太陽近き百日紅

白蓮や常の淀のあればこそ

# 月の刻

信里由美子

菩提樹の花散る森や神涼し

神の森夏木の底の静寂かな

水澄んで触れゆく風の水となる

水影をかむる水影水澄めり

水澄みて水底の景伸び縮み

むら雲の切れ間切れ間の良夜かな

時化去つて磨きぬかれし良夜かな

月の香を夜気に零して女王花

暁闇に魔法の解けし女王花

月下美人この世に刻む月の刻



## 稜線

蓮岡健美

春潮に乗りて弥山を遥かとす

ハープ弾く蝶の纏れて飛ぶ如く

高々と水を離れて咲く蓮

溝蕎麦のかくも一面なりしかな

稜線はガレ場を隠し紅葉初む

濃竜胆山の高さに咲きにけり

俳句道難所続きや獺祭忌

廃線の駅舎に残る秋灯

新米の折目正しき紙袋

海の色濃き秋鯖を買ひにけり

# 夏から秋へ

三宅 進

川船の流れ彩る夏柳

夏の夜幻想の灯に城浮かぶ

寝苦しき夜々の闘ひ熱帯夜

雷鳴の競ふが如き日々となり

笠石の奉燈点す夏の暮

山小路小笹の中に秋の虫

爽やかな空を仰ぎて深呼吸

秋立ちて島影出づる帆掛船

鱗雲さざ波空を流れ行く

高原の畑を彩る蕎麦の花

## 丸亀城

山下祐子

この町も日曜市や豊の秋

一の門先はあつぱれ菊花展

鑿跡も秋色の中丸亀城

城壁の顔様々や秋日濃し

秋草の風に抗ふものなし

野ぶだうやニンフ集まりゐる如く

手土産にひよいとあけびを山男

草の実は善女の足を選びつく

秋風が天守に運ぶ古賀メロデー

今昔をつなぐ秋日の天守閣

# 海と道

與田武彦

瀬戸内の夕日が光る潮干狩

麦の秋一直線に伸びし道

犬と見る瀬戸の夕日に夏来る

石垣の夢の世界や合歡の花

腰痛め顔も洗へず昼寝かな

昼下がりに兎島の札所蟬の声

秋の蟬つくつく鳴くや散歩道

秋の空由加の古道は通学路

鳥が鳴き通草が落ちし由加古道

稲刈やたなびく煙なつかしく

## 潮風の色

米元ひとみ

しぐれ忌の知らぬ道こそ愉しけれ

珈琲のうまさも蔵の町の冬

古い母を華と据ゑたる初写真

帯に咲く紅のいちりん春立てり

鉄橋を音の去りゆく雪解川

藪椿咲くも落つるも影つれて

八掛に選るさみどりも梅の頃

サックスの低く加はる朧の夜

横丁に風の抜け道つばくらめ

パンジーに潮風の色加はりぬ

# 爽やかや

渡辺牛二

どの顔も笑顔の地蔵曼珠沙華

禅寺の裏に猪掘りし跡

濁り水山湖の秋を隠しけり

風強し駅のトイレに枯落葉

いがぐりを踏みし感触ハンドルに

露座売りの椅子に居眠る秋日和

これ見よと茸通路の真ん中に

秋蝶のくぐりし木戸をくぐりけり

草の実にいつ捕まりしとも知れず

爽やかや腕に上着をちよいとかけ

## 追悼

合歡の会の重鎮・小六誠一郎さんが亡くなられました。かねてより入院加療中でしたが、昨年十二月、容体が急変し帰らぬ人となりました。七十歳という、これから俳句に専念できるとき、惜しんで余りありますが、これも天命であればいたしかたありません。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

合歡の会

## 悼みて

富阪宏己

### 寒椿訃報は突如来りけり

日々、看取っている家族はともかく、離れて暮らす友人・知人には、突如として訃報が届く。目の前の雑事に追われ、離れて暮らす友の事は頭から離れている。訃報は我に返らせ、日常生活という流れに立ち止まらせる。改めて友を見、自分を見つめる時間が始まる。それは暗く、美しい寒椿がポトリと落ちる風情に似ている。美しく、悲しい瞬間である。きっと、私自身の死も突然であろう。訃報はそれを教えてくれる。

改めて、日々の生活を見つめ直す。今、私は何をせねばならないのかと。ひととき、寒椿のような凜とした気持ちになつて。

### 星冴ゆる夜の郷愁となられたる

親しい人の死はたまらない。呼んでも、叫んでも生き返ってくれないからだ。風になったか、鳥になったか、花になったか。宮沢賢治が妹トシを探し歩くように、力の限り歩いてみるが会うことができない。そうして、もう歩けなくなったとき、ふっと生前ともに過ごした日々が蘇る。親しい友は私の記憶の中で生きています。笑い合ったり、言い争ったりはできないけれど、私の思い出の中で、日に日に懐かしい人となつてゆく。

一人、寺苑を歩くとき、歩き疲れて休むとき、友と過ごした時間を思い出す。  
生きれば生きるほど、親しい人を喪ってゆく。それは、私の思い出を豊かにしてゆく事だ。思い出しながら微笑み、思い出しながら涙ぐむように。  
星の冴え渡った凍える夜の、私の胸の内を暖かくしてくれる。  
悼むとは、帰らぬ友を郷愁の中へ入れてあげる事かも知れない。  
友のために、私自身のために。



### 俳句をちよっとかじってみて

山下祐子

俳句に触れ、俳句らしきものを作り始めて、約一年たった。アンソロジーにも、こんな俳句一年生の私の句も載せて頂き、有難い事である。

今回、「何か書いてみる？」というお言葉に甘え、ちよっと一年たった事だし、記念に、俳句について、なんとなく考えたり思ったりしている事を書いてみようと思う。

初心者の私には、俳句（らしきもの）一つ作るのも、おおごとである。毎度毎度句会の前になると、句が出来ず、四苦八苦である。挙句の果てに、句会前夜になると、「もう！句が作れないから、明日の句会はお休みにする！」と、夫に八つ当たりするのも毎度のこと。

なんか作らなきゃと焦ると同時に、「句会にいらっしやい。楽しいし、勉強になるよ。」と、

俳句の道を開いて下さったひとみさんの言葉に、自分に出来るかどうか、あまりよく考えもせず、「はい。」と返事をしてしまった自分を呪ってみたり、また、当時着物に夢中だった私に、「句会に着物でいらっしやいな。素敵だと思わわ。」のひとみさんの甘い誘い文句に、またまた、ふらふらと「句会に着物なんて・・・、ちよっといいかも。」と、俳句がどんなものかも知らずにこのこと出かけ、なんて考えなしだったんだろうと猛省してみたりである。

そして、何とか七句作って句会に出てみると、なんだか自分の句が馬鹿みたいに見えて、また落ち込む。

では、やめてしまえばいいようなもの。やめなのは何故か。それは、私自身よく分からない。心の奥底にある負けず嫌いが、「このままで終ら



せたくない。」と言っているのも本当のことであるが、まだ入口辺りをうるちよろしているのに、俳句の魅力とやらに引き込まれたのだろうか。

だいたい私は、俳句の事を殆ど知らない。もちろん、国語の授業で、俳句が十七文字の文学である事は習ったし、芭蕉や一茶や子規の句を覚えさせられたりもした。でも、まだまだ子供だった私には、俳句は古臭くて、気難しいおじいさんが、こむずかしい顔で頭を捻っているというイメージしかなかった。当時の私には、源氏物語や伊勢物語、詩歌なら与謝野晶子の方がロマンチックで心ときめくものであった。

そんな私が、何故、俳句の道に足を踏み入れたのか。それは、ひとみさんの句、

### 佐保姫のピアスや明けのひとつ星

との出合いである。

二年程前から通い始めた和裁教室に、ひとみさんがおられ、教室に、富阪先生の句やご自身の句

を飾っておられた。でも、その頃の私は、苦手な縫い物を始めたばかりで、和裁に必死で、なんか短冊がかかっている位にしか思っていなかった。

そして、数ヶ月たったある日のことである。ちよつと教室にも慣れ、少しだけのんびりお茶を飲む余裕が出来た私は、ふと、ロマンチックな絵が描かれた葉書が壁にかかっているのに気づいた。最初は絵に、そして如何にも達筆で芸術的な文字に。「ピアス」の三文字が目飛び込んで来る。踊っている。ひとみさんが皆に、句を読んでくれ、佐保姫の話をしてくれた。その時のことを思うと、まだドキドキする。

私は、ただただ驚いたのだ。これは俳句なのか。これが俳句なのか。今まで、単に十七文字で詩を作るというくらいの認識しか無かった俳句が、一つの物語のように多くを語り、色彩や、風や、香りを語るのだ。

「とても素敵だわー。」そんな平凡なありきたり

の感想しか言えなかったが、それから、新しい句がかかるのを楽しみにするようになった。あまりに達筆すぎて読めなかったり（書道の先生の書なので）、分からない言葉は、ひとみさんに教えてもらった。

最初、十七文字を駆使して作るのが俳句と思っていたが（実際そうではあるのだが）、一つの短編小説を、ギリギリまで削いで削いで十七文字に結実させた、それが俳句なのではなかるうかと思うようになった。

以前習っていた絵の先生が、私の絵を見て、「つくづく絵画は、整理整頓だと思っわ。」と言ったのを思い出す。きっと俳句もそうなのであろう。私の一番の苦手である。

富阪先生がいつもおっしゃる。見たまま、感じたままを大事にして。私も、見ているし、美しいものを見たら美しいと感じるし、感動もする。でも、如何せん、言葉にならないのである。自分

の内で処理できないのだ。それは、私自身が人生経験が浅く、薄っぺらな人間であるということが多分に関係しているのは事実ではあるが、整理整頓ができない私の場合、要る物と要らぬ物の選択の折、どうもいつも要らぬ物の陰に陰にと要る物が隠れてしまう。ちよつと、私には無理な作業のように思える。

しかし、思うてみる。何故、この世に、絵画があり、文学があり、人は歌い、踊るのか。人はきつと孤独なのであろう。孤独が故に、一人ではいられぬのであろう。誰かに自分を分かって欲しい欲求があるのだらう。自分の中にある思いを誰かと共有したいのであろう。その思いが、ある人は筆をとり絵画を、ある人は口をついた言葉にメロデーとリズムが備わり歌を、ある人は小説を、ある人は詩を、そして俳人は俳句を。言葉なんて最初は記号であったに違いない。それを、取捨選

扱していくうちに、文学と呼ばれるものになったのであろう。ひよつとして太古からの「この思いを伝えたい」という欲求の結実が俳句なのかも知れない。

ならば、やはりのん気にはいられぬ様だ。ほんの少しでもかじったのであれば、もう少し身を入れて俳句をやってみよう。何故なら、あまりに多くの先人達が、私達に遺し与えてくれたプレゼントなのだから。上手に出来るかどうかは、また別の話。とにかく、いただいたプレゼントに「ラッキー！」と、楽しもう。少し心が晴れる。

でも、多分、きつと、いえ確実に、次の句会の前夜、「もう！明日の句会はお休みにする！」と叫んでいるだろう。だって、整理整頓も苦手だけれど、小さい頃から、八月三十一日にまだ夏休の宿題に追われているようなどうしようもない子だったのだから。



## 嵯峨野

石井宏幸

### 青竹の俄に近く秋の風

加藤楸邨

俄にとは、風が吹き青竹がその艶やかな光を撒き散らしながら揺らぎ始めた時に違いない。そして、とたんに青竹を身近に感じ、嵯峨野を身近に感じたというのだろう。秋風は自分に遠い場所、遠い過去に吹きぬけてゆく遙かな感覚を伴うと思うが、それを身近に感じたのは嵯峨野ならではないか。

嵯峨野の外れにある化野念仏寺。元々風葬の地であったものを数多の石仏を置くようになった。その数八千。

### 残る虫石仏石に還りつつ

富安風生

八月には千灯供養も行われ、石仏を照らす。風生の句にあるように目鼻なき、石の角も丸くなった仏たちが集められ賽の河原として供養されている。

先日、京都の大学に通う次男の下宿を訪れた序でに喧噪の嵯峨野に足を伸ばした。竹林の小径から、平清盛が寵愛した白拍子祇王が隠棲した祇王寺、化野念仏寺、旧嵯峨御所である大覚寺と廻ったが、照り戻り、時雨れ、冬紅葉の色に染め上げられるようにして庵、石仏、苔庭があった。

### 苔撃打つ祇王寺や散紅葉 散紅葉過去となりゆく色に積む

宏幸

◆アンソロジーの編集をお手伝いするようになった頃、句会を終えての帰り道で先生が、「こういつた物を十号まで続けるのは大変な事なので。何とか十号までは続けましょう。」と言われたのを、今でも鮮明に覚えています。

◆そんなに大変な事なのかと思いつながら、どう返事をしたのかは記憶にありませんが、とうとうその十号になるのだなあ、あつと言う間違ったなあ、と思っていた矢先に先生のお怪我の報が入って来ました。

◆さらに小六誠一郎さんの訃報までもが……。

◆これが十号の壁という物なのかと慌てましたが、皆様のご協力で、何とかお届けすることが出来ました。

◆私のように、元気だけが取得の間もおりますが、闘病中であつたり、リハビリ中であつたりと、皆様それぞれの事情をお持ちとお聞きしております。そんな中から、今回も素敵な十句をお寄せいただいた皆様には、心からお礼申し上げます。

◆十号の次は二十号ですね。さきやかではありますが、このアンソロジーの発表の場が、皆様の俳句の上達と元気の源となり続けられるよう、微力ではありますが、私を始め編集委員一同で、お手伝いをさせていただきます。ただくつもりでおります。

◆今回は止むなくお休みされた方も、今回は是非とも元気な十句をお寄せ頂きますよう、一同お待ちしております。

しはぶぎの 一つ過ぎ行く窓の外

(牛二)

## アンソロジー合歓 Vol.10

平成 25 年 3 月 1 日 発行

発 行 合歓の会

発行責任者 富阪宏己

印 刷 弘文社

岡山県津山市川崎 168

連 絡 先

〒 701-0304

岡山県都窪郡早島町早島 3991-144

富阪宏己方

次号締め切り

平成 25 年 6 月 30 日

原稿送付先

〒 708-0015

岡山県津山市神戸 719-7

渡辺牛二

Email : info@nemunokai.net

Tel. : 090-8710-7067

平成二十五年三月一日発行 第十号